

秀吉の都市形成アイデンティティーに関する研究 A Study on Hideyoshi's City Formation Identity*

三國 宣仁**, 岩崎 義一***

By Norihito MIKUNI** and Yoshikazu IWASAKI***

1. 目的

信長は、僅かな支配年数にもかかわらず、仏教に致命的な打撃を与え、多くの関所を取り払って商業を発展させ、貴族や寺院が所有する世襲的・封建的荘園制度を廃して近代官僚制の嚆矢ともいえるべき職業的武士階級を前提とした近代的封建制度の基礎を形成するなど多くの新たな政治思想を開発した。この思想は、秀吉、家康に受け継がれ明治維新以後までも変革の潮流を先導したが、これに深くかかわったのが「産業経済」「宗教」であったといえよう。

中世後期には、楽市・楽座が成立し軍事・政治のみならず、経済に基礎づけられた都市発展の基盤が作られた。都市としてその形を見せ始めた城下町は、領国の政治のみならず商業的統制の中核としての機能をもつようになり、そこには門前町・寺社町・寺内町といった商人・職人・町人などが活動する都市拠点となる町場を形成している場合が多かった。「産業経済」と「宗教」の存在は、中世城下町以降の都市形成とその変容に大きなモメントとなっていた。

信長の死後、秀吉は全国を再統一し大坂城を築城して、商人の移住などによる経済の活性化や本願寺の誘致といった宗教の活用など、一部では信長の手法を踏襲しながらも独自の手法で都市を形成した。とくに彼は、大坂三郷の一翼をなす天満寺内町での都市形成を巡る過程で、経済と宗教を

巧みに使って都市政策を展開し近世統一権力の都市計画を具現化しようとしたといわれる¹⁾²⁾。秀吉が如何なる思想を持って都市政策に経済と宗教を活用しようとしたのか、その概念と構図が明らかにされれば、現代都市の骨格が形作られた近世城下都市以降の都市政策思想の潮流を把握できる可能性が期待される。

本研究は、秀吉の宗教観、経済観について展覧するとともに、都市政策で執られた諸政策の特質を整理し、本願寺寺内町の都市造営における「経済」と「宗教」の関り方を通して都市形成思想（アイデンティティー）の構造化を行った。

2. 秀吉の宗教観・経済観

インドで生まれた仏教は古代中国社会になじむ形で受け入れられその後日本に伝来したのであり、これは中国的仏教といえる。同じ頃、中国の儒教と道教が伝来し、我が国独自の儒教と神道として浸透していった。中国的仏教が伝来後、日本的仏教として台頭するが、これは日本人的気風（つまり神道における神秘主義的宗派）に染まりつつ浸透した新仏教の一派である日蓮宗がその典型と考えられる。また、同時期に開かれた浄土真宗はかなり合理的で世俗化を許し庶民に浸透した宗教であり、いわばキリスト教のプロテスタント系の性格を有するものと考えられる。これらは武装化し大きな宗教的権威と経済力を有していたため時の権力者によって潰される。信長が日蓮宗を潰したのは、もともと我が国には日本人気風に根付く神道とこれに裏付けられた天皇（現人神）が存在してきたのであって、政治は信長で教理は神（天皇）という構図に反することを明確にする必要があったためと考えられ、その結果、墮落し、執政に無用とされ

* キーワード：豊臣秀吉、天満本願寺寺内町、都市形成、アイデンティティー

**学生員 大阪工業大学大学院工学研究科土木工学専攻

***正会員 博(工)大阪工業大学工学部

〒535-8585 大阪市旭区大宮5丁目16番1号

TEL (06)6954-4109 E-mail. mikuni@civil.oit.ac.jp

た日蓮宗は本山を焼かれ壊滅的な打撃を受けた。一方、浄土真宗も日蓮宗と同様に弾圧されるのだが、信長の後を継いだ秀吉は、時代を突き崩し動かしてきたものは経済であり、その経済の要となる商品の生産と流通の中心が都市であることを早くから見抜いていた。このため浄土真宗の寺内町が為政と都市造営に恰好の材料であり、これを信長のように破壊することなく、うまくコントロールしながら大坂、京都等の都市政策に活用したものと考えられる。西欧の近代資本主義の誕生にプロテスタントの倫理が大きく関わったことと、秀吉が浄土真宗と寺内町を都市政策に活用せしめたという事実関係と軌を同じくしている。

このように、歴史的に一貫した天皇制という観念形態を機軸にして天皇親政や幕政が行われてきた中で、仏教は中国式仏教（南都仏教）から鎌倉期において日本式仏教（新仏教）へと変化していくのであるが、天皇制が国家政治と民の結束の紐帯として深く根付いていたことから、これらの中にレゾナントの相剋があったものと考えられ、天皇制に類似する祈祷的宗派は一掃すべきと観られ、プロテスタント的実利的・世俗的宗派は為政者秀吉にとって有益となる部分（経済と都市形成）だけを摂取して残りは一掃すべきと観られてきたという過程をみることができる（表1）。

3. 秀吉の都市政策における特質

（1）市街地形成と身分制： 平野郷から平野町へ、伏見から上町・玉造へそれぞれ商工業者を移住させる³¹⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾ことにより大坂城周辺の商人市街地化を進めたが、この過程で執られた商人の集住を特化させる町場形成は空間的な身分制確立をも同時に進めたといえよう。また、本願寺を天満に誘致後³¹⁾⁴⁾⁵⁾、既往の寺内町門徒の社会的位置づけを一般町人とする信長の階層解体手法を継承して、町人の匿名性を有する天満本願寺寺内町に対して寺内掟・検地を実施⁷⁾⁸⁾⁹⁾し、新たな市街地形成とともに身分制の確立を進めた。さらに、大坂城の増設とともに三の丸内に伏見から移転させた大名屋敷を置くとともに、もともと三の丸内にあたる場所

表1 宗教の態様と時代的変遷

時代	仏教宗派	宗派の動向	宗派と時代的変遷
成化		仏教復興	鎌倉前・後思想 ・神仏習合
隆慶	大正 天正	鎌倉前・後 ・浄土宗	・南無仏教（鎌倉）の対政治影響力拡大 ・南無仏教と離れるため平安室へ遷移
天保	徳川 天保	新仏教（浄土宗）の台頭 ・浄土宗（密教系）の興隆	・天皇家の治世期に、天保寺造営 ・天保の仏教から日本の仏教へ ・幕府仏教から民間仏教へ ・全国的・戒律主義的仏教から在野的な 仏教へ ・天保寺造営の意義
明治	明治 天保	新仏教の興隆と新仏教 （鎌倉前・後）の台頭	・天保の治世期に、天保寺造営 ・天保の仏教から日本の仏教へ ・幕府仏教から民間仏教へ ・全国的・戒律主義的仏教から在野的な 仏教へ ・天保寺造営の意義
大正	大正 天保	新仏教の興隆と新仏教 （鎌倉前・後）の台頭	・天保の治世期に、天保寺造営 ・天保の仏教から日本の仏教へ ・幕府仏教から民間仏教へ ・全国的・戒律主義的仏教から在野的な 仏教へ ・天保寺造営の意義
昭和	昭和 天保	新仏教の興隆と新仏教 （鎌倉前・後）の台頭	・天保の治世期に、天保寺造営 ・天保の仏教から日本の仏教へ ・幕府仏教から民間仏教へ ・全国的・戒律主義的仏教から在野的な 仏教へ ・天保寺造営の意義
平成	平成 天保	新仏教の興隆と新仏教 （鎌倉前・後）の台頭	・天保の治世期に、天保寺造営 ・天保の仏教から日本の仏教へ ・幕府仏教から民間仏教へ ・全国的・戒律主義的仏教から在野的な 仏教へ ・天保寺造営の意義
令和	令和 天保	新仏教の興隆と新仏教 （鎌倉前・後）の台頭	・天保の治世期に、天保寺造営 ・天保の仏教から日本の仏教へ ・幕府仏教から民間仏教へ ・全国的・戒律主義的仏教から在野的な 仏教へ ・天保寺造営の意義

にいた商工業者を船場等へ移す⁴⁾⁵⁾¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾など身分別に居住区を区分しており、これは市街地形成をつかった身分制の明確化といえよう。このように、身分制の進展とともに市街地が形成されていったというよりは市街地形成とともに身分制の確立が大坂の至る所で進められていった。

（2）身分制と都市の掌握： 太閤検地¹⁵⁾は農民を農地に固定させる意図が強く、これによって離村向都を阻止し都市を武士と町人の場として社会的に構造化したといえよう。そして刀狩令¹⁶⁾は、土一揆や一向一揆の発生を抑制したが、これは庶民の一致団結のエネルギーを削ぐとともに都市に及ぶのを防止することで、都市独自の秩序を維持させるための遠因になったものと想像される。また、惣無事令により諸大名の平定と領地替えが行われたが、このことは武士を在地から切り離すとともに、都市に依存せざるを得ない職業武士層の創出に繋がった。一方、信長の都市政策とも言うべき「近江安土山下町掟書」を継承した天満本願寺寺内町の寺内掟・検地や京都町割は⁸⁾⁹⁾、混在した階層の区分と純化を促し各々の都市の町並みと骨格を形成していった。このように、身分制という仕組みが都市に浸透するとともに都市そのものの掌握が可能となつていったのであった。

（3）都市掌握と流通経済： 直轄領であった京都、博多など重要都市では町割の実施とともに楽市楽座や地子免除を認め¹⁶⁾、流通経済の発展に力を入れ、そして堺では既存の自治と交易で培った蓄積を活かすため座を残し地子を課す¹⁷⁾一方で、大坂では直轄領と同様に流通経済の発展を優先させるという都市の掌握を通して流通経済の振興をはか

った。そもそも楽市楽座は社寺の有する商業的特権を取り上げ商工業を大名の統制下に置くことを意味しており、大名の統制は都市の掌握であり、都市でのみ成立する商工業は都市とともに掌握されたのである。このように都市の掌握を通して商工業いわゆる流通経済への政策が講じられた。

(4) 流通経済と市街地形成： 京都の関所の多くを撤廃する³³⁾ことにより、畿内での人やモノの移動が増え都市間相互連関による市街地形成が進んでいった。また、平野郷や伏見などから富裕商工業者を大坂へ移住させる³⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾ことにより、彼らが有する取引や技術、情報等の広域的なネットワークが起爆剤となって大坂経済は発展し市街地が展開していったし、併せて本願寺の誘致³⁴⁾⁵⁾による参集力の活用によっても同様の結果を得ることができた。一方、大地震に伴う堺の港湾機能が低下する以前から、石山本願寺と淀川舟運など淀川河口の港湾機能は優れ、上町と天満本願寺寺内町の淀川沿い地区に運輸・物流が栄えた事¹⁹⁾から流通経済が栄え、これとともに市街地がさらに展開していった。このように流通経済の発展を通して都市施設の配置に影響を与えるなどして市街地形成に深く関わっていった。

以上のように、秀吉は(1)から(4)までの為政と都市政策によって権勢の維持・拡大をはかったといえる。これら事項は共通し同質なものとして看過されがちであるが図1のように構造化され、市街地形成→身分制確立→都市掌握といった都市を社会システム変革の装置として利用し政策をうっていった機軸と、都市掌握→流通経済→市街地形成といった都市を経済(商工業)システム変革の装置としていった機軸の二面性がよみとれる。都市は社会システムと経済システムの変革の舞台であり、秀吉は都市を舞台に宗教をして社会と経済の両面から捉え直して変革を進めたのである(図1)。

4. 秀吉の本願寺寺内町政策と都市形成アイデンティティー

(1) 对本願寺移住政策： 秀吉は信長の対宗教政策を踏襲しようとしていたし、石山寺内町の焼

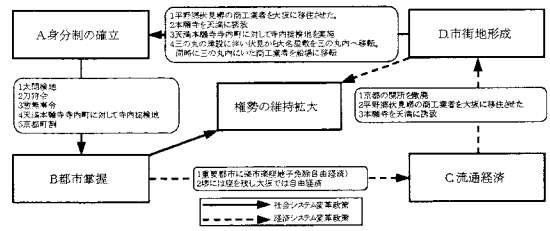


図1 都市政策と執政の関連構造

き討ち以降転々としていた本願寺側も秀吉に対して弾圧を加える存在とみていたことから、彼は不可避とみていた両者の衝突を天下平定の一環として早い時期に何らかの解決策を講じる必要に迫られていたであろう。しかし、武力は一層の時間を要し徒に天下統一の時期を先延ばしするだけであり、武力によらない方法として本願寺の存在を認め寺内町経済を楽市楽座の自由経済に組み込むことで本願寺と市街地形成を統制下におく方法を企図したと思われる²⁰⁾。その具体的な方法として、城郭より俯瞰可能で逆襲を一気に行えないよう淀川対岸に付寄せしめ、合わせて大坂市街の一翼の形成と舟運事業の拠点となる地の利の活用²⁰⁾といった戦略的視点によって天満への本願寺移住政策をとったものと考えられる。

(2) 对本願寺配置政策： 農民や町人などに広く浸透した一向宗を潰すことなく生かすことはむしろ民衆の心を掴むことであり、信仰者の結束力は天下統一の強力な武器に代わるものであることを彼が認識していたであろうことは想像に難くない。このことが動機付けになり門徒等の集住する寺内町を具体的な市街地形成の道具にしようと考えたのであろう。その手法は、垣や濠などを設置させず御堂を旧来と反対に配置²¹⁾して、本願寺の監視が行き届く「プラ²⁰⁾」を徹底した点に見いだすことができる。

さらに、「寺内牢人衆隠匿発覚事件」に伴い寺内町の潜在的な謀反の要因が明らかになり²²⁾、これを排除して権勢を顕示し維持することが必要になった。彼は寺内町における社会の把握と制御の仕組みを確立すべく信長の都市政策の一部を継承するなどして監視、把握、制御の面から天満を牛耳ろうとする。その手法として寺内掟や検地によって居住区と居住者の登録と台帳整備を行った²⁰⁾²³⁾ので

ある。

(3) 対本願寺促進政策：もとより街道や淀川という交通の要衝に位置する天満は都市発展の条件を備えていた。これを熟知していた彼は、この地点に本願寺を配置することで全国の信者等の参集力²⁰⁾²³⁾をさらに高め経済発展の拠点にしようと企図していたに違いない。そのため「近江安土山下町掟書」と同様に法度で楽市楽座を実施するとともに、知行主の本願寺を五百石の得分権²⁰⁾²³⁾でこれに代えるなど経済と行財政の両システムを組み込むに至った。また寺内町は当時、不安定な社会システムの体制確立において民衆の心情を貫く宗教は危険な存在であり、彼にとって両刃の剣としての危機意識を抱き、的確な管理と社会秩序の維持対策が焦眉の急であったに違いない。寺内掟や当寺法度によって寺内門徒の武力性や、従来の寺内町の治外法権的社会慣行の排除を実施しようとした。この対応として寺内掟による町奉行の設置や火事の処理や家屋の売買・賃貸等町人の日常生活²⁰⁾²³⁾に係る社会ルールを整備したのである。

以上のように、秀吉の為政は移住、配置、促進の組合せで実施することにより市街地を形成してきたと考えられる。またこれら政策は、彼の思想を動機、理念、課題という枠組みで捉え直すことができる。そして、動機・理念では時代背景の要因を為政においていかに効率的に扱うべきかという「配分」の概念が傾向として強く、課題においては執政によっていかに権力と富を得るべきかという「分配」の概念が傾向として強い。つまり、秀吉の多くが都市を舞台にした政策思想であり、そしてそれが経済的傾向の強い思想で貫かれていたといえよう(表2)。

5. まとめ

以上の分析を通して、以下のことが明らかになった。

- ① 秀吉はプロテスタント的な実利的・世俗的宗教である一向宗の有益となる部分を摂取して、これを為政に活かそうとした。
- ② 秀吉の都市政策は市街地形成→身分制の確立→

表2 秀吉の対本願寺寺内町における政策

思想軸	為政軸	移住	配置	促進	
動機	「秀吉は信者の対宗教政策を積極しようとし、本願寺も秀吉の弾圧を加えようとする考え、両派の衝突は不可避の状況であり、解決策を講じる必要に迫られた」と見做す	「信者の結束力は大きな武器であり、一切の衝突を先か後かは民衆の心を固むことと見做す	「寺内町人配付は大きな武器であり、一応の衝突を先か後かは民衆の心を固むことと見做す	「天満は交通の要衝であり、都市発展の条件を備えていた」	「不安定な社会システムにおいて宗教は危険な存在であるという意識
理念	「本願寺の寺内町経済を次期市街地の自由経済に取り組むことで寺内町と市街地形成を統制下に置く」	「本願寺内町を市街地形成の軸とする」	「権勢を顕示することによって参集力を増し、経済発展の拠点にする」	「本願寺を配置することによって参集力を増し、経済発展の拠点にする」	「的確な管理と社会秩序の維持対策(武力性や治外法権の排除)」
課題	「大阪城から見おろせる位置に本願寺を建設し大阪市街地の一翼として天満を開発」	「土居や堀を配置させない」	「寺内掟・法度」	「参集力500石」	「町奉行の設置・寺内掟・当寺法度」

都市掌握と都市掌握→流通経済→市街地形成の機軸の二面性で捉えられ、都市を舞台にした社会システムと経済システムの変革を促した。

③ 秀吉の為政における市街地形成は移住・配置・促進の3カテゴリで捉えられるとともに、政策は動機・理念・課題の思想構造として捉えられる。そしてその思想構造は経済的な傾向の強いものであった。

以上のように、宗教そして都市を舞台にした経済を把握して、為政を維持するという構図が読み取れる。この構図こそが秀吉の都市形成アイデンティティといえる。

一方秀吉には、対本願寺政策において強固な意志が感じられる町割について、内裏をいただく条坊制を意図した傾向がよみとれる。また本願寺は天満に移転後数年のうちに京都に移転させられるが、その後も大きな発展をみた天満の商工業の成長をみるとかなり強力な独自の要因が内在していたものと考えられる。これらについては、今後の研究課題としたい。

参考文献

- 1) 摂津天満本願寺 寺内町の構成(上) 伊藤毅 日本建築学会計画系論文集第371号 P12-1,122
- 2) 摂津天満本願寺 寺内町の構成(下) 伊藤毅 日本建築学会計画系論文集第380号 P13-2,133
- 3) 図集 日本都市史 高橋康夫他 東京大学出版会P14
- 4) 同3) P132,133
- 5) 『千年都市大阪 まつば物語』岩本康男他 凸版印刷株式会社 P24
- 6) 『都市空間 中世都市空間 I (大坂城下町にみる都市の中心と周縁)』錦橋俊夫 中世都市史研究会 P73
- 7) 『よみがえる中世』佐久間貴士 平凡社
- 8) 摂津天満本願寺 寺内町の構成(中) 伊藤毅 日本建築学会計画系論文集第376号 P13-1
- 9) 『秀吉の経済感覚』脇田修 中公新書 P141~143
- 10) 同5)P26,27
- 11) 同6)P54
- 12) 同6)P75
- 13) 『中世から近世へ(中世都市から近世都市へ—大坂城下町成立の意義—)』佐久間貴士 名著出版 P66
- 14) 同13)P90
- 15) 詳説 日本史研究 五味文彦他 山川出版社 P220~229
- 16) 同9)P118~123
- 17) 同9)P148,149
- 18) 同P112,113
- 19) 『大坂の町と本願寺』大阪市立博物館 毎日新聞大阪本社 P58~61
- 20) 同8)P134,135
- 21) 同2)P129
- 22) 同8)P130
- 23) 同8)P132,133